報告

釜山日本村における実践研究
－幼児クラスの具体的活動を通して－

中村　智子 [1)]

Practical Research in Busan-Japan Village
－Through Concrete Activities in the Kindergarten Class－

by

Tomoko NAKAMURA [1)]

キーワード： 釜山日本村，　韓国，　日本語，　幼児教育，　教材

要旨： 日系子女に日本語や日本文化を伝えていく趣旨で 2011 年に釜山外国語大学の関係者が立ち上げた釜山日本村という団体がある。この団体は、2023 年現在、幼稚部と小学部から構成されており、保護者が自主的に運営している。筆者は新聞記事でその存在を知り、幼稚部の具体的な実践活動を調査すべく、2023 年 5 月から 7 月の月に 1 度、計 3 回にわたり現地を訪れた。小論の目的は、幼稚園教諭としての実務経験を活かし、実際に子どもたちの前で日本語に関わる活動内容を明確にし、現状課題とその展望について考察することである。

研究教材として毎回の活動で絵本や紙芝居を読むことや、パネルシアターの実演をすることは、目の前にいる子どもたちと日本語で対話しながら進めていくことができ、大変有効であった。また日本語をしっかりと声に出すことに重きをおき、全員の子ども達が参加できるように配慮した。特に日本独自の児童文化財である紙芝居は、絵が大きく、見やすく構成されている為、集団で楽しむことができ、同じ内容を共有することで仲間意識が芽生え、子どもたち同士のつながりに拍車をかける効果的な教材であることがわかった。

発達年齢に沿う内容を考慮し準備を進めているが、実際のところ、個々の日本語への理解度や習熟度の状態がまだ把握できていないのが現状であり、これからの課題でもある。

普段の子どもたちは保育園や幼稚園、小学校で韓国語を使用し、家庭では日本語のみ、または両方の言語を使用している。その為、日本語によるコミュニケーションで保護者と

受理日：令和 5 年 12 月 20 日

1）純真短期大学こども学科　准教授

子どもの心をつなぐという、このような活動環境はとても重要であり、それが釜山日本村の役割であると考える。

１．はじめに

本稿は、筆者が大韓民国（以下、韓国と略記）の釜山日本村の幼児クラス（以下、幼稚部）を訪問した実践活動内容を明確にし、その現状課題と展望について考察することを研究の目的とする。

概要は後述するが、釜山日本村とは韓国第２の都市・釜山にあり、日系の子どもたちに日本語や日本文化を伝えていく趣旨で、2011 年に釜山外国語大学の関係者が立ち上げた団体である。筆者はこの存在を 2018 年 10 月 29 日付の西日本新聞記事 1) で知り、近い将来に機会があれば現地を訪ね、実践者として活動したいと考えていた。それから 5 年の歳月は流れたものの、思い切って現地の事務局宛てに連絡を入れ、こちらの意向を伝えた。その後、インターネット上で互いの自己紹介や情報交換をして現在に至る。

今回は筆者が 2023 年 5 月から 7 月の月に 1 度、計 3 回にわたり釜山広域市（以下、釜山市）を訪ね、現地の幼稚部の子どもたちの前で日本語に関わる活動を実施したことを、どのような教材がより効果的なのかも含めて具体的に明らかにしていく。

２．調査研究方法および倫理的配慮

時　期：2023 年 5 月 14 日（日），6 月 11 日（日），7 月 9 日（日）の計 3 回
時　間：午前 10 時から午前 11 時 30 分
対　象：釜山日本村の幼稚部 2 歳児から 6 歳児
場　所：TIS 外国語学院【釜山市・海雲台（ヘウンデ）】

本研究を進めるにあたり、釜山日本村に関する資料などは、事務局より掲載に関しての許可を得ている。

３．結果と考察

（１）釜山日本村の状況

釜山日本村は現在、釜山市の海雲台に位置し、日本人の親をもつ日系子女を対象に日本語や日本文化を伝えていく趣旨で、2011 年に釜山外国語大学で立ち上げられた団体である。その後、先行的な活動期間を経て、2012 年に釜山日本村として正式に活動が始まった。

クラスは幼稚部と小学部があり、開始当初は幼稚部のみで、2016 年より小学部が新設された。受け入れ対象年齢において幼稚部は満 2 歳以上の未就学児で、小学部は小学 6 年生までとなっている。現在は 2 歳児から小学 4 年生が通っている。活動は第 2、第 4 日曜日の月 2 回を定期的に行い、幼稚部は午前 10 時から午前 11 時 30 分、小学部は午前 10 時から正午である。そして、子どもたちに教える先生役は基本的に保護者が担当し、分担され

た日程に合わせて準備を行い、活動後はその担当者がブログに投稿する流れになっている。保護者には入会時にその旨を説明し、承諾を得ている。勿論、無報酬である。

そして、新たに 2023 年からは釜山外国語大学の日本人留学生が TA（Teaching Assistant）として活動を支援している。さて、活動内容は下記の活動計画表（表１）を参照されたい。特に幼稚部は毎回のテーマに沿った絵本の読み聞かせや歌、ゲームや工作等を通して日本文化に親しむ活動をしている。韓国の年度は 3 月より始まる為、釜山日本村でも毎年 3 月に顔合わせがあり、前期（4 月～7 月）と後期（9 月～12 月）の合わせて 8 ヵ月の月 2 回で計 16 回の活動を実施している。現在、対面式で行われているが、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で活動が一旦休止し、2021 年度はオンラインでの活動が再開され、2022 年度も引き続きオンラインでの活動となった経緯がある。その活動もあって 2023 年度も Zoom を利用したオンラインを継続し、もう一方でオフライン（対面式）の活動を実施している。

年会費は幼稚部 25,000 ウォン（2023 年 9 月現在約 2,750 円）、小学部 30,000 ウォン（約 3,300 円）で主に教材代として運用されている。場所はもともと釜山外国語大学（牛若洞）の講義室で行われていたが大学移設の為、TIS（Tokyo International language School）外国語学院で活動を行っている。本来は学習塾を経営している建物であるが、日曜日を使用しない事と、交通手段のよい場所であるということで、この場所を借りて運営している。他にも年に 1～2 回、釜山外国語大学の体育館を使って文化体験や運動会を行っている。2017 年度からは「見守り隊」という名の運営委員会が発足した。事務局、会計、施設管理、幼稚部と小学部の保護者と日本人留学生で構成され、保護者たちが自発的によりよい環境へと導き、活動運営に携わるようになっている。

釜山日本村　クラス別　活動計画表（表１）

クラス／項目	幼稚部	小学部		
		たまごクラス A	おたまじゃくし A	かえるクラス A
目　的	・日本の遊びや日本の文化を体験する ・日本語でのコミュニケーション能力を高める ・日本語力を向上させる			
対象者	在韓日本人、日系韓国人、日韓国際子女、日本帰国子女			
	未就学児 （満 2 歳以上）	就学児童		
定　員	15 名	10 名	10 名	10 名
活動内容	日本の遊びや文化について学ぶ	日本語を学ぶ	日本語を学ぶ	日本語を学ぶ
	毎回のテーマに沿って、歌、読み聞かせ、ゲーム、工作等の活動を通し日本文化に親しむ	ひらがな・カタカナ・小 1 漢字の読み書き練習（文）。小 1 国語	小 1, 2 年生の漢字の読み書き、小 2 の国語教科の勉強、音読、	小学校 4 年生の勉強とゲーム。音読、歌、他己紹介、書写、漢

		教科書の勉強及び歌やゲーム	単文を書く。ゲーム。	字の学習。
	親子参加型体験	参加型学習・グループ活動・個別指導		
担当者	保護者・日本人留学生			
活動日時	・第 2、第 4 の日曜日 ・年間活動 幼稚部・・・4～7 月、9～12 月（月 2 回×8 か月　計 16 回） 小学部・・・4～7 月、9～12 月（月 2 回×8 か月　計 16 回） ※幼稚部・小学部ともに 3 月に顔合わせ ＜オンライン＞ 幼稚部（午前 10 時～10 時 30 分） 小学部（午前 9 時～9 時 30 分） ・たまごクラス A ＜オフライン＞ 幼稚部（午前 10 時～10 時 30 分） 小学部（午前 10 時～12 時 00 分） ・たまごクラス A ・おたまじゃくしクラス A ・かえるクラス A			

（「釜山日本村」の歩みより 2022[2)] 一部引用　筆者加筆）

（２）幼稚部の実践活動内容

幼稚部の実践活動を各月ごとに研究の主旨に沿って表記し、活動の振り返りは主に筆者本人が子どもたちの前で実際行なった内容を考察とする。

＜第 1 回目＞

実　施　日　時：2023 年 5 月 14 日（日）午前 10 時から午前 11 時 30 分

当日の参加者：子ども 3 名　保護者 2 名　TA（Teaching Assistant）3 名

担　　当：保護者 1 名と筆者（後半の午前 11 時 15 分から午前 11 時 30 分）

◇幼稚部の活動内容

時間(分)	子どもの活動	活動を進める上での留意点
10:00～10:01	○日本語で挨拶をする。	・先生役の保護者が子どもの手本になるよう、大きな声ではっきりと挨拶することに心がけ出席をとる。また元気よく返事ができた子どもたちをしっかりと褒め、次の活動に繋げていく。
10:01～10:21	○うた「どんな色がすき」を歌う。	・音源を用意し、一度保護者や TA を含めて全員で歌う。 ・次に歌の中に出てくる色をみんな

		で一つずつ探しながら、色への関心に繋げていけるよう進める。
10:21～10:35	○日本の行事「こどもの日」を知る。	・「5 月 5 日は何の日か知ってますか。」と子どもたちに問いかけ、そのヒントとなる画像を準備する。 （「こいのぼり」、「かしわもち」、「しょうぶ」のそれぞれの意味も含めて紹介する。）
	○手遊びうた「おべんとう」をする。	・音源を用意し、一緒に歌いながら子どもたちが模倣しやすいよう大きく手を動かすことに心がける。次に「ぞうさんのおべんとうだったらどうかな」、「ありさんのおべんとうだったらどうかな」等と子どもの様子をみながら楽しく進める。 ・次の活動準備の為、子どもたちが座っているマットを片付ける。
10:35～10:50	○身体あそび「忍者ゲーム」をする。 ・跳んだりしゃがんだりを繰り返しながら楽しむ。 （隠れ身の術） （抜き足・差し足の術）	・前回の復習もふまえ、先頭に立った先生役が振り向いたら、子どもたちはしゃがむことを確認して活動に取り組む。 ・次に先生役が手裏剣を投げる模倣をして「あたま」と言ったら、子どもたちはしゃがみ、「あしもと」と言ったらジャンプすることを確認して活動する。
	・右手と左手を確認する。 （手裏剣の術）	そして今度は手裏剣を手でブロックする時に「右・左」の確認をして遊びにつなげていく。子どもたちからみて鏡になるよう、手の挙げ方には十分に心がける。
10:50～11:00	＜休憩＞	
11:00～11:15	○手遊びうた「グー・チョキ・パー」をする。 ○折り紙をする。	・子どもの反応を見ながら、ゆっくりと合わせながら進める。 ・様々な色の折り紙を用意し、子どもたちに折り方がわかるよう丁寧に進める。
11:15～11:30 （※筆者担当）	○パネルシアター「やおやのおみせ」を楽しむ。	・日本語をゆっくり、そしてしっかりと丁寧に話すことを心がけ、子どもた

		ちの反応をみながら進めていく。参加型のパネルシアターを準備し、場面ごとに手で相槌を入れることができるよう、先に練習し、理解を深めてから活動を進めていく。
	○パタパタシアターを見る。	・半分の画用紙をめくると、別の絵が現れるという既成の教材を準備し、子どもたちと対話しながら終始取り組む。
	○のび～るシアターを見る。	・短い時間で、すぐに出来る既成の教材を活用し、子どもたちが集中できる環境を心がける。
	○終わりの挨拶をする。	・日本語で終わりの挨拶を行う。

当日の幼稚部の出席は 3 家族 3 名の参加であった。日本からの訪問にあいにく予定人数より欠席が多いことを運営側は気にされていたが、釜山外国語大学に通っている日本人留学生の 3 名が TA（Teaching Assistant）として参加し、子どもたちに寄り添いながら一緒に活動を盛り上げた。前半は当日担当の保護者が歌あそびや 5 月 5 日にまつわる日本文化について紹介したり、身体表現あそび等をした。それから筆者が準備した 3 つの教材で活動を始めた。教室にあるホワイトボードを利用してパネルシアター「やおやのおみせ」を子どもたちの前で披露した。大きな白い布が用意されると、不思議そうな顔で筆者を見つめ、おしゃべりもせず集中した面持ちで始まりを待っていた。このパネルシアターを選択した理由は、演者が一方的に進めるのではなく、見ている側にも一緒に参加してもらう内容であった為である。手遊び歌を取り入れながら、やおやのお店に並んでいるものを想像しながら進めていく。並べられたものが野菜であったら、手をたたき、違っていたら手を胸の前でクロスにする方法である。次はどんな野菜がでてくるのだろうと子どもたちは手をたたく準備をしながら、期待して待っている姿が垣間見られた。初めてみるパネルシアターに子どもたちはもちろんのこと、一緒に参加している保護者や留学生達も関心を示し、和やかに取り組むことができた。次に「のびのび博士のパタパタシアター（藤原邦恭　著）」を活用し、パタパタと半分回すと絵柄が変わる教材を準備した。大はしゃぎしながら黒い模様の形が何なのかを子どもたちの発言に注目し受け止めながら進めていった。筆者の意図を理解した様子で、こちらからの応答に大きな声でカードの絵柄に返答した。最後は「のび～るシアター（藤原邦恭/著）」を披露し、初回を終えた。

＜第 2 回目＞

実　施　日　時：2023 年 6 月 11 日（日）　午前 10 時から午前 11 時 30 分

当日の参加者：子ども：6 名(1 名の見学者含む) 保護者：5 名(先生役の保護者 2 名含む)

TA：4 名

担　　当：保護者 2 名と筆者（後半の午前 11 時 15 分から午前 11 時 30 分）

◇幼稚部の活動内容

時間(分)	子どもの活動	活動を進める上での留意点
10:00～10:10	○日本語で挨拶をした後、一人ひとり自己紹介をする。 ①名前　②年齢　③好きな色　④好きな食べ物　⑤お父さんの名前　⑥お母さんの名前 ○授業のお手伝いをする TA（留学生）の自己紹介を聞く。	・子どもたちに聞こえるよう大きな声で挨拶をし、一人ひとりに自己紹介の内容を伝える。 ・日本語で自己紹介ができた子どもに対して、しっかりと褒め、大きな拍手を送る。 ・子どもと同じ質問で答えることを心がける。
10:10～10:17	○今日の日付、曜日、天気を確認する。	・「今日は何月何日何曜日ですか」と子どもたちに問いかけ、反復して確認する。その後、様々な天気の様子がわかる動画を用意し、見終わったら、「今日の天気は何ですか」と同じように問いかけ、天気を確認する。
10:17～10:30	○表現遊び ①　「あたま・かた・ひざ」 ②　「ジャングルぐるぐる」を音楽に合わせて踊る。	・動画を用意し、模倣しながら子どもたちと一緒に参加者全員で楽しく表現する。
10:30～10:40	＜休憩＞	
10:40～11:15	○製作「スティック作り」 ・折り紙をじゃばらに折る。 ・スティックの土台となる棒に折り紙を巻きつける。 ・じゃばらが開くよう、紐をセロハンテープでとめる。	・出来上がりのスティックを子どもたちの手の届くところに置き、実際に今から製作する気持ちを高める。 ・はさみを使用する場合は保護者や TA の手を借り、切った折り紙を子どもに渡すよう配慮する。 ・一つひとつの工程を丁寧にゆっくりと進め、その都度、確認しながら取り組んでいく。
11:15～11:30 (※筆者担当)	○手遊び「とんとんとんひげじいさん」をする。 ○紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ」を見る。 ○絵本「しろくまのパンツ」を	・最初に子どもたちの前で披露し、その後、一緒に取り組む。同じ手遊びに変化をつけ応用編として紹介する。 ・ゆっくりと大きな声で読み始め、場面によって子どもたちとの掛け合いがある為、反応をみながら進めていく。 ・全員の子どもたちが絵本の見える

	見る。 ○ミュージックパネルシアター「ふとんのなかで」を楽しむ。 ○手遊び「ミッキーマウスマーチ」をする。 ○終わりの挨拶をする。	位置に座ったことを確認してから読み始める。 ・パネルシアター用の布を用意し、歌をうたいながら、途中で子どもたちの返答に期待しながら進めていく。 ・手遊びを最初に披露し、その後、子どもたちと一緒に歌をうたいながら取り組む。 ・次回の参加に期待がもてるよう配慮する。

今回は幼稚部の子ども 6 名（そのうち 1 名は見学者）と保護者 4 名、TA と筆者を含む 15 名で活動を行なった。まず前半は保護者 2 名が用意した活動に取り組み、最後の 15 分間を筆者が担当した。最初に子どもたち一人ひとりの自己紹介が行われ、6 つの質問（①名前②年齢③好きな色④好きな食べ物⑤お父さんの名前⑥お母さんの名前）に対して、誰一人として韓国語は使わず、知っている日本語を使って答える姿がみられた。質問④の「好きな食べ物」が特徴的で、人参と答えたり、いちご（返答 2 名）、牛肉（返答 2 名）そして好きな食べ物は何もないと答える子どももいた。また製作では先生役の保護者が子どもたちに楽しんでもらおうと折り紙でできる「スティック作り」を考え、さらに完成した実物を見て、子どもたちの製作意欲へとつなげる導入は素晴らしかった。多少、はさみを利用したり、折り紙の折り方が普段よりも難しいところはあったが、保護者の手を借りながら、やり抜こうとする集中した取り組みがみられた。

スティック作りに時間を要したものの、最後の活動を筆者が担当した。この日に韓国では珍しい日本独自の児童文化材「紙芝居」を持参した。筆者が幼稚園勤務時代に何度も繰り返し、子どもたちの反応がよかった紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ（まついのりこ/作）」を思い出し、準備をした。読む枚数が少なく、同じ言葉を繰り返し反復する場面が多い箇所もこの紙芝居の魅力である。もう一つはミュージックパネルシアター「ふとんのなかで（増田裕子/作・絵）」を用意し、子どもたち、そして保護者や TA の前で披露した。今回はその話の中で男の子の絵人形が出てきて、それが幼稚部に通っている子どもに似ていたことで大盛り上がりをみせた。その子どもは恥ずかしそうにしていたが、日本語の会話にとても上手に答える場面があった。

＜第 3 回目＞

実　施　日　時：2023 年 7 月 9 日（日）　午前 10 時から午前 11 時 30 分

当日の参加者：子ども：5 名　保護者：5 名(先生役の保護者 2 名含む)

TA：3 名

担　　当：保護者 2 名と筆者（午前 10 時 35 分から午前 11 時 30 分）

◇幼稚部の活動内容

時間(分)	子どもの活動	活動を進める上での留意点
10:00～10:05	○日本語で挨拶をする。 ○今日の日付、曜日、天気を確認する。	・子どもたちに対して元気に大きな声で挨拶することを心がける。 ・「今日は何月何日何曜日ですか」と子どもたちに問いかけ、反応をみながら、ゆっくりと確認していく。言葉を発した子どもたちに対してしっかりと褒める。
10:05～10:20	○動画で「間違い探し」をする。 ○プリントの「間違い探し」をする。	・事前に準備したパソコン上の動画（海辺の生き物編）を子どもたちに見てもらい、そこで違った内容が出てきたら、答えを言う形で楽しく進めていく。 ・子どもたちにプリントを配布し、間違っている箇所を丸で囲むことを説明する。また日本語で書かれてある問題が読めない時は、TA が側について補助をする。出来たら大きな丸をつける。
10:20～10:25 10:25～10:35	○「ジャングルぐるぐる」を音楽に合わせて踊る。 ＜休憩＞	・前回の活動で子どもたちに人気があった動画を用意し、模倣しながら子どもたちと一緒に参加者全員で楽しく表現する。
10:35～10:40 (※筆者担当)	○手遊び「おべんとうバス」をする。	・最初に一度、子どもたちの前で披露し、その後、一緒に手遊びを行う。手遊びは子どもたちが自然に模倣できるように動作を大きくし、楽しい雰囲気を出す。
10:40～10:50	○「くだものカード」を使って楽しく遊ぶ。	・既成のカードを持参し、2 枚のカードが揃ったら、その果物の名前を言う遊びで一人ひとり順番に進めていく。
10:50～11:30	○「あ」と「아」の違いを知る。 ・シートに広げられた後、カードをよくみて「あ」を手に取る。	・子どもたちの前にひらがなの「あ」とハングル「아」の丸く切ったカードを用意し、ばらばらに広げて、ひらがなで書かれた「あ」を 7 個見つけることを伝えて始める。上手に見つけられたら、カードの枚数を一緒に数える。 ・一度カードを回収して、今度は筆者とじゃんけんをして勝ったら、「あ」

	○ひらがなの「あ」を使ってじゃんけんゲームをする。 ○絵本「へんしんトンネル」を見る。 ○紙芝居「みんなでぽん！」を見る。 ○手遊び「いわしのひらき」をする。 ○パネルシアター「ひよこのおかあさん」を楽しむ。 ○絵本「なつのおとずれ（かがくいひろし」を見る。 ○「だるまさんがころんだ」をする。 ○終わりの挨拶をする。	のカードを渡すゲームをする。一度、練習をしてから本番をする。 ・全員の子どもたちが絵本の見える位置に座ったことを確認してから読み始める。 ・絵本と同様、子どもたち全員が見える位置を確認し、反応をみながら読み進める。 ・数を含む手遊びになっている為、一つひとつの指の運びまでしっかりと意識しながら進める。 ・準備にかかる時間も、間が空かない様に子どもたちと会話をしながら取り組む。 ・夏休み前の活動になる為、夏の様子にふれる絵本を紹介し、子どもたちの夏休みに向けての期待が膨らむよう楽しく読む。 ・予定より時間に余裕があった為、「だるまさんがころんだ」をする。 ・日本語で終わりの挨拶を行う。

当日の幼稚部の出席は 4 家族 5 名の子どもたちの参加で始まった。最初に保護者 2 名で 30 分の活動を行い、急きょ残りの 60 分を筆者が担当することになった。当初は事務局より 30 分の内容で伺い、準備をしていたが、当日担当の保護者より懇願され、時間を変更して進めていった。日曜日の朝も、子どもたちは予想通りに元気で、明るく大きな声で挨拶を交わした。先生役の保護者は子どもたちにカラーでプリントされた「間違い探し」の用紙を配布し、上と下の絵の違う場所をペンで丸をする学習に真剣に取り組んでいた。今回もＴＡ（Teaching Assistant）の留学生 2 名が子どもたちに寄り添い、ひらがなで読めない字があったらさりげなくサポートする姿がみられ、一つひとつ答え合わせをしてスムーズに終了した。その後に音楽に合わせて身体遊びを行ない、休憩後に筆者の活動を開始した。既成の「やさい・くだものぴったりカード（わらべきみか/作・絵)」を用意し、2 枚のカードが揃ったら果物の名前を筆者に伝える遊びである。そして先行体験として絵カード遊びをした後、今回はひらがな 50 音の最初の字である「あ」と韓国語の基本母音「아」の違いがわかるカードを自作し、準備した。幼稚部の子どもたちにとって日本語の認知度がどれくらい定着しているのか不明ではあるが、少しずつでもひらがなが定着できる一つの教材として試みた。子どもたちの前にカードを広げ、その中から日本語の「あ」を探す遊びである。また子どもたちの手に持ちやすい丸型に工夫した。遊びの意図が伝わるかを心配したが、ルールを説明すると、先ほどの果物カード遊びと同様、枚数を数えながら、ひらがな「あ」を友だちよりも早く見つけようと必死になって探している様子がみられた。日本語の「あ」を見つけては嬉しそうに筆者に見せる姿が印象に残った。逆に韓国語「아」

にはあまり大きな反応がみられなかった。次にひらがな 50 音と韓国語「아」で応用編として取り組もうとしたが、時間が限られていた為、機会をみて行なうことにする。簡単に遊べるひらがな「あ」カードを利用してじゃんけん遊びをし、ひらがな「あ」の定着を図った。みんなでひらがなの「あ」の発音をして終了した。それから、パネルシアターや絵本読みに紙芝居と活動を続けた。いつも話の途中に動きがみられる子どもも、最後は筆者に「面白かった。」といい、大きな変容がみられた。

さて、今回の活動で特に意識して取り組んだことは夏休み前の活動であるということだ。韓国も日本と同様に夏休みがあり、当日に紹介した絵本「なつのおとずれ（かがくいひろし/作・絵)」は、梅雨明けから夏に向けて日本の古き良き夏の風物詩が絵でたくさん表現されており、思わず見入ってしまう場面が数多くある。最後のページの細かい絵に子どもたちは興味津々、黙って覗き込んでいた。保護者にとっては懐かしい夏の場面があり、今回の活動も様々な協力を得て、無事に終了した。

４．総合考察

釜山日本村には 2023 年 9 月現在、6 家族で計 8 名の幼稚部の子どもたちが在籍している。筆者は以前に幼稚園に勤務していたとは言え、2 歳から 6 歳の異年齢が一つのクラスに集まっての関わりは初めての経験であった。さて実際にどのような教材が子どもたちに受け入れられるのであろうか。ひとまず子どもたちが日本語に親しみを感じ、その言葉にふれるにふさわしい教材として絵本が挙げられる。読めなくても幼い時から絵本に書いてある言葉のひびきや繰り返しのリズムを耳に入れることは日本語に親しむ上で、何よりも大切である。そこで、単に発達年齢だけでなく、子どもたちの普段の生活状況や行動そして日本語への理解など様々な背景を考慮して選択しなければならない。

現在、日本の絵本は世界的に評価され、翻訳も多く出版されている。韓国においても本屋へ行くと日本の絵本が韓国語に翻訳されている。筆者は絵と作ともに日本の絵本を選択し、なるべくまだ韓国で翻訳されていない絵本、子どもたちがまだ読んだことのない絵本を探して読み聞かせをすることに心がけている。意外に絵本を選択することは難しい。しかしながら、筆者が一貫して重きをおいたのは対話で参加型に進む教材に配慮したことである。まずは言葉を口に出して日本語のひびきや美しさ、そしてリズムに親しむことを大事にした。

例えば絵本の読み聞かせをしたが、その中で知らず知らずのうちに繰り返し日本語を口にする環境作りを目指した。いつの間にか日本語を使い、知らない言葉を口に出したり、あるいは初めて耳にする言葉も少なくなかったはずである。保護者や筆者が読み手となり、読んでもらうことで子どもたちは落ち着いて絵本の世界を楽しみ浸ることができる。それが絵本に書かれた文字を見て、文字への認識や興味を育むきっかけになるであろうし、また語彙力が豊かになる可能性へとつながっていく。将来、子どもたちが日本語の文字で書いてある絵本を手に取って読むことを期待している。筆者自身、改めて絵本への関心を深めるよい機会となった。子どもたちの集中力も年齢に差異はあるが、なるべくテンポよく、リズムよく進めるよう心がけた。

次に、おそらく韓国に在住する日本の子どもたちは紙芝居を初めて目にしたことであろう。「うわぁ～。大きい～。」と驚きながら日本語で筆者に話しかけてきた。言うまでもな

いが、紙芝居は絵が大きく、見やすく構成されている為、集団で楽しむことができる。保護者たちも目を細めながら一緒に参加する姿がみられた。読み手にとって紙芝居は絵本よりも子どもたちの表情が見えやすいため､間や呼吸をとりながら読み進めることができる。やはり優れた日本独自の児童文化財の一つであり、幼稚部の子どもたちにとって効果的な教材であると明らかにいえる。

同じ時間に同じ内容を共有することで仲間意識が芽生え、月に２度ではあるが、通っている子どもたち同士のつながりにも拍車をかけることになるであろう。紙芝居に少しずつ慣れ親しんできたら、日本の昔話を子どもたちに紹介したいと考えている。どのような反応がかえってくるのか、今から楽しみである。絵本や紙芝居などはなるべくその季節に沿ったものや、子どもたちの身近で親しみのある素材を考慮して探している。ここで、これまでの３回の活動の中で、絵本を子どもたちの前で読み、反応が大きかった作品は、絵本では「へんしんトンネル」（あきやまただし/作・絵)、紙芝居では「おおきく　おおきく　おおきくなあれ（まついのりこ/絵・作)」であった。どちらも参加型の教材であるが､「へんしんトンネル」では筆者がページをめくると模倣するように子どもたちの口が開いて何度も繰り返し、そこで言葉のもつ面白さがわかり、笑い声が飛び交った。想像していた以上の反応で、このような魅力的な話の展開が見られる絵本も継続して読み続けていきたい。

発達年齢に沿ったものを考えて毎回準備を進めているが、実際のところ日本語への理解度や習熟度の状態がまだ把握できていないのが現状であり、これからの課題である。集団での学びと個別での学びと両方をもちより、これからも子どもたちが自然に楽しく日本語や日本文化に関心を持ち、それらが徐々に身についていくことのできる教材内容を研究していきたい。そしてひらがなの理解を可視化できる方法もあわせて考えていきたい。特に幼稚部はまず日本語に関心をもつことに重きをおいている為、ひらがなを書くという活動は実際のところ小学部からとなる。ひらがなで様々な言葉を知り、この活動時間だけでも日本語にふれて忘れないでほしいとの保護者の熱い思いが、筆者の参加した活動を通して感じ取られた。

さて「釜山日本村」に通う子どもたちには、一つだけ約束ごとがある。それは「日本語を使うこと」である。教室の中では、先生役の保護者や友だちそしてＴＡ（日本人留学生）にも日本語で話すことが随分と浸透しつつあり、子どもたちの中では専ら暗黙の了解なのである。韓国で暮らす子どもたちは、保育園や幼稚園、小学校において韓国語を使用し、生活している。その為､日本語は家の外に出ると触れる機会が少ない言葉になってしまう。

休憩中に２組の保護者と話す機会があり、自宅での日本語との関わりについて尋ねてみると、一方の家庭において母親とは日本語で話し、父親とは韓国語で話している。また、もう一方の家庭では父親が日本に留学した経験もあり、両親ともに日本語で子どもと会話していると話を伺った。子どものおかれている環境は家庭によって様々であるが、子どもにとっては日本語も韓国語もどちらも主要な母語であり、特に日本語を母語にもつ母親としては子どもに日本語を継承してほしいという強い気持ちが、この場所を訪れてひしひしと伝わってきた。子どもが成長し、世間では就職の際に話せると有利であるという概念以上に、むしろ保護者と子どもの心をつなぐ言語によるコミュニケーションが釜山日本村の役割であると考える。

５．おわりに

今回は筆者が釜山日本村の幼稚部で直接に子どもたちの前で活動した具体的な実践研究を明らかにした。釜山在住の日本の子どもたちに何かできることはないかと、その一心で訪韓した。現地では初対面にも関わらず、温かく迎え入れて下さり、回数を重ねるごとに子どもたちも保護者の方々も筆者に話しかける場面が増えた。いつも心がけているのは、子どもが安心して活動できる環境と筆者に向けた子どもの気持ちに寄り添い、どんな言葉でも聞き逃さず、受容することを忘れないことである。まだまだ満足できるものではないが、参観して頂いた保護者からは子どもたちがこれまで見せたことのない集中力で話を聞く姿がみられたと話して下さった。時には日本から持参した教材について質問攻めにあい、学習への関心度が高いと実感した瞬間もあった。

釜山日本村は保護者の方々の協力により、活動が成立している為、幼稚園の実務経験のある筆者に関心を寄せて頂いていることを肌で感じている。保護者はわが子に日本語を学習する環境を整えるだけでも大変だが、同じ境遇の他の家庭の子どもたちに先生役として活動を分担することは大変だと実感する。また筆者はともかく保護者にとって毎回の活動内容を考えることは困難であろうし、なかなか思いつかないこともあるだろう。保護者がどのような内容を希望されているのか、話を伺いながら今後の活動の参考として検討していきたい。毎回、授業参観のようではあるが、釜山と言われなければ教室中は全て日本語である。異国の地で子どもたちは器用に日本語と韓国語を使い、とてもたくましく生きている。まさしく国際社会に生きる子どもたちである。日本からの訪問に釜山日本村創立者、兼 釜山外国語大学教授 鄭起永（ジョン・ギヨン）先生と直接お会いする機会を頂き、その中で「これからの未来は日本人、韓国人など枠にとどまらず、同じ東アジアの人々という広い概念でそれぞれの視点で考えをもった人間に成長してほしい。」と話を伺い、その言葉が今でも耳に残っている。

活動を終えると、最年少の子が小学部に通わせてあるお姉ちゃんの教室へ行きながら、「オンマ～、オディヤ～。(ママ～、どこ～。)」と言って、教室の扉を開けていく様子に周りの参加者たちも思わず微笑む。もう一人は幼稚部の最年長で、いつも保護者に付き添われて筆者の元へ必ず帰りの挨拶をしてくれるのだが、どうも恥ずかしい様子でなかなか言葉が出ずに終えていた。家では日本語をよく使い、会話もできると保護者が代弁した。

ようやく３回目の挨拶の時、「またきてね。」と手をふってくれた。この一言が筆者の原動力になっている。月に一度の限られた時間で、手探りの状態が続いているが、釜山日本村に通う子どもたち一人ひとりにとって、「日本語って楽しいな。面白いな。」と押しつけでもなく、自ら進んで日本語を学ぼうとするきっかけ作りの一助になればと考える。これからも引き続き、地道に活動を実践していきたい。

謝辞

釜山日本村において実践研究を遂行するにあたり、釜山日本村創立者、兼 釜山外国語大学教授 鄭起永先生をはじめ、いつも活動日程の調整や現地での様々なお世話をして下さる釜山日本村事務局、兼 釜山外国語大学准教授 松浦恵子先生に多大なるご協力を頂き、

心より感謝申し上げます。そしていつも笑顔で迎え入れて下さる釜山日本村の保護者の皆さまと幼稚部の子どもたちにも重ねて感謝申し上げます。

引用・参考文献

1) 西日本新聞 朝刊（2018 年 10 月 29 日）　アジア編 pp4
2) 釜山日本村の歩み 2022（2023）東海文化社　鄭起永 編著
3) https//ameblo.jp/busan-nihonmura/
4) https://sites.google.com/view/busannihonmura/
5) 川口慶子（2016）「韓日国際結婚家庭の子女を取り巻く継承日本語 教育の現況と課題」日語日文学研究 PP254-271
6) 呉 世蓮（2020）「韓国の幼児教育における地域社会との連携について－多文化教育の視点から－」立正大学教職教育センター年報 第 2 号 pp29-37
7) 中村智子（2017）「韓国の保育教材の特性と工夫」九州女子大学紀要 第 53 巻 2 号 pp61-73
8) 髙橋　司（2014）乳幼児のことばの世界 聞くこと・話すことを育む知恵　宮帯出版社
9) 徳永満理（2002）絵本で育つ子どものことば アリス館
10)藤原邦恭（2019）のび～るシアター　いかだ社
11)藤原邦恭（2023）のびのび博士のパタパタシアター　いかだ社
12)まついのりこ（1983）「おおきくおおきくおおきくなあれ」童心社
13)まついのりこ（1987）「みんなでぽん！」童心社
14)阿部　恵（2005）ふれあいいっぱい パネルシアターこれくしょん　メイト
15)増田裕子（2012）ミュージックパネル「ふとんのなかで」アイ企画
16)増田裕子（2011）ミュージックパネル「ひよこのおかあさん」アイ企画
17)Tupera tupera（2012）「しろくまのパンツ」ブロンズ新社
18)あきやまただし（2002）「へんしんトンネル」金の星社
19)かがくいひろし（2008）「なつのおとずれ」PHP 研究所